

たむらみつまさ
田村充正
静岡大学人文学部教授

翻訳家育成をとおして 日本文化の紹介者を育てる

しずおか世界翻訳コンクールの挑戦



たむらみつまさ ● さいたま市生まれ。早稲田大学第1文学部卒業、同大学院文学研究科修了。専門は比較文学、ロシア文学。著書に『雷国』は小説なのか—比較文学試論—』、共編者『川端文学の世界』全5巻がある

日本よりも海外の日本語学習者に
よく知られたコンクール

1995年12月に誕生した「しずおか世界翻訳コンクール」は、今年で13年目を迎え、現在第7回の募集が行なわれている。

日本の小説3編、評論3編の課題図書の中から各1編ずつを選び、これを指定された外国語に翻訳する。報奨として、最優秀賞者に賞金100万円と1年間の日本留学助成金、優秀賞者に賞金30万円、奨励賞者に賞金10万円が授与され、最優秀賞者と優秀賞者は静岡市で開催される表彰式に招かれる。



第7回しずおか世界翻訳コンクールのポスター。応募は2008年12月10日に締め切れ、表彰式は2009年秋に静岡県内で行なわれる予定

翻訳という地道で日の当たらない仕事に、これほど際立ったスポットライトを当てるコンクールは稀である。実行委員会事務局のスタッフが指定言語の国のおもだった大学や日本研究センターを巡って広報した成果もあり、このコンクールは日本国内での知名度の低さに比べ、海外で日本語を学ぶ人々の間でよく知られている。

世界が、日本という国の文化や思考をいつか理解してくれるのを黙って待っているのではなく、日本みずからがそれらを広く正確に伝えるための方途として、静岡県が辿り着いた試みが、このしずおか世界翻訳コンクールである。

日本語を理解し、日本の文化を紹介してくれる海外の優秀な人材を発掘し、支援することに大きく寄与している。

本来は国家事業として取り組まれてもよい文化政策だが、「コンクールは長目で静岡が世界の文化都市に育つよう、今後も継続して行いたい」と、主催者である石川嘉延静岡県知事は第1回コンクールの審査結果発表の席で述べている（「静岡新聞」1997年6月5日付）。

異質なものの、未知のものを
受容する翻訳という行爲

翻訳という言葉を聞くと、中学校か

注 ● 静岡県の文化創造プロジェクトは次のURLで参照可能
しずおか文化のページ
www1.sphere.ne.jp/shizuoka



第1回しずおか世界翻訳コンクールの表彰式（1997年）。対象言語は英語、フランス語で、それぞれ18カ国84件、6カ国20件の応募から、優秀な翻訳に賞が贈られた

ら英語を唯一の外国語として学ぶことに慣れた私たちは、英文和訳および和文英訳の技術的な問題としてのみ、受けとめがちだが、翻訳という概念が捉える領域は思いのほか広く深い。

生活するうえで外国語を使う必要のない人にとっても、他人の言葉を耳にし、これを自分の言葉として解釈する際には言い換えという作業（言語内翻訳）をおこなっている。また、人気マンガをもとにした映画やテレビドラマを見て、原作との違和感を覚える人は、芸術間翻訳の問題に直面しているといえるだろう。

そもそも赤ん坊が母親や周囲の大人たちの言葉を聞いて言語を習得していく過程も、ロシアの心理学者L・ヴィゴツキイが言うように、外言を内言化する翻訳の問題なのかもしれない。つまり、異質なものの、未知のものを変換して受容する翻訳という行為は、人間の生活の根源的な営みなのである。

翻訳論の中心に置かれている、外国語を母語に、あるいは母語を外国語に移すという言語間翻訳の問題は、それぞれの言語がもつ特性を十分に認識したうえで、その背景にある文学観、文化観、世界観までも視野におさめなが

ら取り組まねばならない作業である。しかし、この翻訳によって異文化交流（他者の理解）が大きく進展することも事実である。

静岡が歴史の中で果たしてきた翻訳の伝統を受け継ぐ

翻訳の問題を歴史的に振り返るならば、幕末から明治初年の文明開化期にかけて、国家存亡の急務として欧米の社会制度や風俗習慣を取り入れる際、翻訳の果たした役割が限りなく大きかったことはよく知られている。日本の近代文学も、欧米の翻訳作品とおして、はじめて成立したことは否定しがたい事実であろう。

この時代に静岡学問所の教授であった中村正直によって翻訳され、変革期の日本の青年層に大きな影響を与えたサミュエル・スマイルズ著『西国立志編（原題 *Self-Help*）』は静岡藩の援助を受けて出版された。また、現在日本の詩として定着している日本近現代詩の出発点となった西洋詩の翻訳書『新体詩抄』（明治15年）を編集翻訳したのは、静岡藩出身の社会学者外山正一であった。これらのことと、いま静岡県がしずおか世界翻訳コンクールをお

して、欧米ばかりでなく、近隣のアジア諸国やロシアの人たちとの共通理解を模索していることは、明治と平成という時代の隔たりを超え、また受信ではなく発信というかたちで、翻訳の伝統を受け継いでいるように思える。

完訳し応募するだけでも高度な日本語能力が必要

さて、ではこのしずおか世界翻訳コンクールはどのように運営され、いかなる成果をあげてきたのだろうか。

課題図書を含むコンクールの応募要項は、前回コンクールの表彰式が開催される9月に発表され、翌年の12月までが応募期間になる。つまり応募者は1年3カ月の期間をかけて、決して平易とはいえない日本語の文章を指定の外国語に翻訳することになる。

指定の外国語とは、英語を常として、これまで第1回からフランス語、中国語、ドイツ語、韓国語、ロシア語が組み合わされ、第6回からはアジアの言語も常設言語に加えられた。こうして第6回は英語とフランス語と中国語、現在進行している第7回は英語とドイツ語と韓国語が指定言語になっている。課題図書はどれもひと癖もふた癖も

注●静岡県内に学ぶ留学生の中から毎年約20名を選び、静岡県知事が委嘱するもの。大使は県内で催される国際交流活動に参加したり、静岡県と母国との架け橋として活躍する。

ある奥の深い作品で、例えば第5回は梶井基次郎『ある心の風景』、藤沢周平『驟り雨』、江國香織『サマーブラケット』の小説3編と、正宗白鳥『トルストイについて(一)』、宮崎市定『論語読み』の愉しみ、池澤夏樹『科学と知的好奇心』の評論3編で、翻訳に際しては6作品6様の難しさがある。

病める主人公の暗い内面を感覚的に綴った梶井基次郎の小説は散文詩のようで捉えどころがなく、物語展開の明快な藤沢周平の作品は舞台となっている江戸の風俗を外国語に移すことに困難を覚えるだろう。評論のジャンルも論語や科学書を対象に論じたものは、それぞれの分野の専門用語の知識が不可欠で、これに裏打ちされた翻訳が求められる。

日本語の中級程度の学習者ではとても歯が立たない作品ばかりで、このうち小説1編、評論1編を完訳して応募するだけでも、相当の日本語の実力者であることは間違いない。

にもかかわらず、この第5回の応募者総数は英語部門181名、ロシア語部門110名、総計291名にのぼっている。この中から数回の審査を経て、

最終的に選ばれた受賞者各5名(最優秀賞1名、優秀賞2名、奨励賞2名)の翻訳作品はすぐにでも出版できる高いレベルにある。

応募者を年代別に見てみると、やはり20歳代が一番多いが、最高齢の応募者は英語部門の90歳代、最年少はロシ

ア語部門の日本に在留する18歳のロシア人女子学生であった。

受賞後もつづく静岡との絆と 翻訳文化交流活動への支援

この第5回英語部門の最優秀賞受賞者で、英国のニューカッスル大学でテイチングフェローをしているアンガス・ターヴィルさんは、受賞後に報奨の留学生生活を静岡大学院で送った。



第5回しずおか世界翻訳コンクールの英語部門の最優秀賞受賞者アンガス・ターヴィルさんは静岡大学院での留学中、県内の高校を巡ったり、地元の県民を対象に「翻訳セミナー」などを開催した。

1年の滞在期間中、「ふじの国親善大使」(選)のように県内の高校を巡って日本の教育制度を視察したり、地元の県民を対象に「翻訳セミナー」などを開催した。また、静岡大学人文学部言語文化学科教員で組織されている翻訳文化研究会の例会で、「日英翻訳における問題と傾向——伊豆の踊子」

ジャパンファウンデーションでは、日本に関する人文・社会科学および芸術分野の図書を翻訳、出版しようとする海外の出版社に対して助成事業を行なっている。左上から時計回りに、『Japonia okresu Meiji (明治時代の日本)』/Nozomi (望) (ポーランド)、『万葉集』(第3巻)/Brody Publishers (チェコ)、『枕草子』(清少納言)/Metis (トルコ)、『ダンス・ダンス・ダンス』(村上春樹)/Slovart (スロバキア)。これらは近年完成した図書の一例



の英訳分析」(『翻訳の文化／文化の翻訳』第2号、2007年3月)と題する研究発表を行なった。

帰国に際しては、県庁を訪問し、「1年間で日本文学の翻訳の難しさを実感した。留学経験を生かし、ニューカッスル大学では翻訳のコースを充実させたい」(『静岡新聞』2007年8月28日付)とコメントしている。今後の抱負としてはノーベル文学賞を受賞した川端康成『雪国』の新しい英語訳の完成をめざすとのことであった。

このようにしずおか世界翻訳コンクールの受賞者たちは、その高い翻訳能力を一度表彰されて終わりというのではなく、例えば静岡県教育委員会が主催している県内の高校への「異文化交流講座」の講師を務めたり(第4回コンクール韓国語部門で最優秀賞を受賞した金命巡^{キムミヨンスン}さんは、土肥高校に向いて近年における韓国の日本文化受容の講演をおこない、同英語部門優秀賞受賞者のナンシー・ロスさんは、吉原高校の国際科でアニメ映画『千と千尋の神隠し』を教材にもちいた翻訳の授業を展開した)、しずおか世界翻訳者ネットワークのメンバーに登録されて、静岡との絆を確認しながら今後の翻訳文化交流活



第6回しずおか世界翻訳コンクールの審査結果発表の様。結果は報道発表だけでなく本人に直接通知され、後日、改めて表彰式が開かれる

動の支援を受けている。このしずおか世界翻訳者ネットワークとは、本コンクールの審査委員長を務めるコロンビア大学名誉教授ドナルド・キーン氏が2003年に設立した組織で、創設の趣旨を次のように語っている。

「現在の日本における翻訳出版のバランスは、外国文学の輸入過多で、日本文学の輸出はその20分の1にも満たないといわれています。日本はもつと日本文学を世界に発信し、経済大国ならぬ文化大国としての日本を知ってもらわなければならない、そのため優れた翻訳者を見出すことが急務と考えます」

しずおか世界翻訳コンクールの最優秀賞と優秀賞の受賞者には、ドナルド・キーン財団発行の認定書が贈呈され、このネットワークのメンバーとして認定されて、翻訳出版のさまざまな助成を受けられることになる。

翻訳をとおして、日本の文学と文化を世界に発信していく、このような試みとしては、古くは静岡県三島市の出身でこのしずおか世界翻訳コンクールの企画委員長を務める大岡信氏が発起した「日本の100冊翻訳の会」や、最近では受賞作品を海外に翻訳出版することを報奨とした「大江健



日本文学研究者で翻訳家でもあるドナルド・キーン氏がしずおか世界翻訳コンクールの審査委員長を務める

三郎賞」、明治から現代までの日本作家の作品の翻訳を海外の出版社から出版し、その一部を世界各国の文化機関に寄贈するという文化庁の「現代日本文学の翻訳普及事業」などが見受けられる。

新しく描かれる21世紀の世界地図の中で、日本の立ち位置を明らかにしていかなばならないときに、こうした文化政策が不可欠であるという認識は、今後高まっていくだろう。

他の文化創造プロジェクトと運動し いっそうのコンクール発展を

このように先駆的で深い意義をもつしずおか世界翻訳コンクールではある

が、順風満帆の未来ばかりを展望できるわけではない。問題のひとつは、県民の認知度があまり高くないという点にある。

コンクールの実行委員会自体は、コンクールを海外に広報し、応募作品を整理し、審査するという水面下の作業を日々つづけている。しかし、県民にとっては2年間に1日1度だけ、国際文学シンポジウムとともにその表彰式が開催されるイベントという印象が強い。実行委員会は、このコンクールへの理解を裾野から広げるため、県内外の高校生などを対象にした「しずおかジュニア翻訳コンクール」の開催にも取り組んでいる。

また静岡県だけの問題ではないが、地方自治全体の緊縮財政の中でコンクールに割り当てられる予算も年々厳しくなっている。著名な審査委員長や企画委員長がご高齢であるため、後継問題もあるだろう。

しかし、現状の困難をなんとか克服して、「世界の文化都市」をめざす静岡県が、今年第5回を迎える「静岡県際オペラコンクール」やギリシャから継承して第2回を開催した「シアターオリンピッククス」など、他の文化創造プロジェクトとともに、日本理解を促す貴重な伏流として、このしずおか世界翻訳コンクールを発展させていくことが期待されている。☺